

統一

第九十六號要目

- ◎勸信要義……………本多日生
- ▲朝の師子吼……………松尾忍水
- ◎日蓮門下各派比較評論……………主筆
- ▲各宗側面觀……………笹川篁堂
- ◎日蓮門徒の帝國主義……………上田不新
- ▲妙乘旅行感慨記……………影山謙二
- ◎法衣を着せる悪魔……………窪田孤松
- ▲千葉の消興……………紫山櫻水
- ◎日蓮大聖人……………關田養叔
- ▲佛耶兩教の衝突……………
- ◎須らく品性の修要に勉めよ……………窪田孤松
- ▲倚門(忍水を送る)……………不新
- ◎人生の最大問題……………山根顯道

大法主二位僧都日什大正師御遺文

前管長大僧正錦織日航師題字

大僧正 小林日正師 編輯

大僧正 本多日生師

和裝 頗美本
實價金三十五錢
郵 税 不 要

本宗綱要

- ◎昔て佛海の大波瀾を奔騰せしめたるものは本書なり
- ◎四箇格言問題を爆發せしめたる大主動者は本書なり
- ◎佛教各宗協會をして畏懼狼狽せしめたるは本書なり
- ◎綱要編纂委員の心膽を寒むからしめたるは本書なり
- ◎妙宗教義の神髓を發揮して組織的に系統的に詳細説述して餘蘊なきは本書なり
- ◎殊に四箇格言の一章を設け恐れず憚らず念佛無間禪天魔眞言亡國律國賊諸宗無得道の旨を痛論して一種獨特の光彩を放てるは本書なり
- ◎讀め、須らく讀め、眞佛教の眞意義を知らんと欲するものは自他宗の僧俗を問はず悉く本書を讀め。

發行所

東京市淺草區新谷町
顯本法華宗 宗務廳

(明治三十年二月廿四日 第三種郵便物認可)

東京市淺草區新谷町四十五番地

(明治三十年二月廿四日第三種郵便物認可 每月一回十五日)
全三十六年四月十五日發行統一第九十六號

鼓の法

施本

本誌は頗る愛らしき小雑誌なり

本誌定價

一部	二 錢
壹年ヶ前金	二十 錢
十部以上	一錢五厘宛
五十部以下	一錢五厘宛
五十部以上	一錢二厘宛

本誌には祖訓、説教、小説、和歌等あり

今般統一團より本誌を毎月一回發行致し只の印刷費のみにてお求めに應ずる事に致しましたから何卒篤志の御方は檀家又は知人へ施本用として御買求め下さい澤山印刷すれば其だけ價を割引ますから續々御注文を乞ふ

○今日の良布教方法は

「法の鼓」を

施本するに限りませんが、小供でも婦人でも假名さへ讀める人は讀んで解る良雜誌
○施本には限らず本誌購讀方もお勸め下さい

東京淺草南松山町

統一團

朝の獅子吼

忍水

うすくない 東に色彩りぬ

黒き魔の暗何處に散りし

さはれ小獸魍魎の類

廣野忽ち耳を聳ざくあり

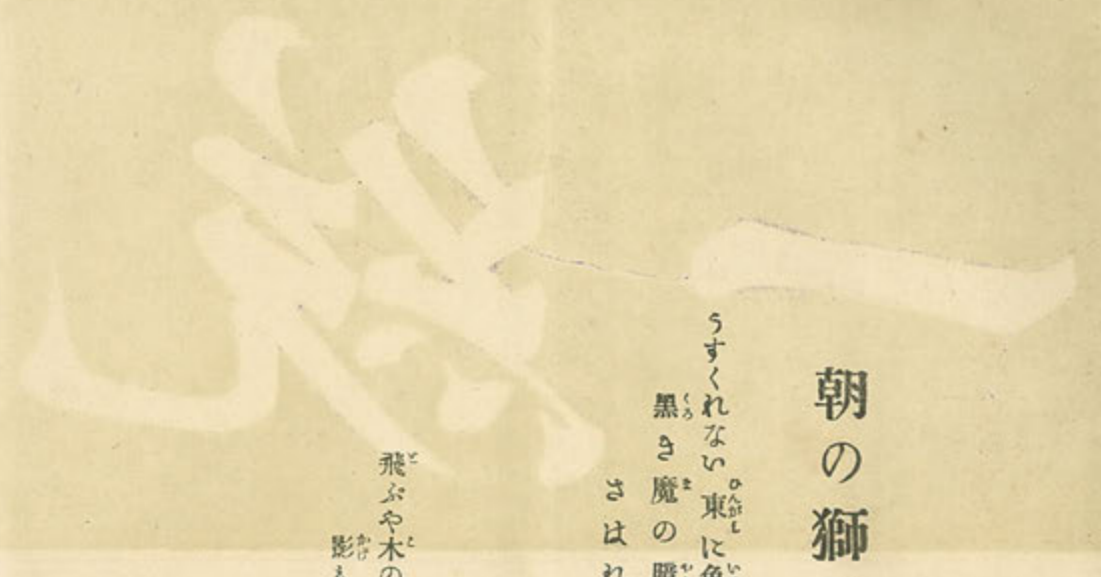
冠りし毛の頭一振りぬ

劍にも似たる尾に直として

飛ぶや木の葉、草はなびさぬ

影もなし形も失せぬ奇怪の獸

力の四脚何とせんか、更に猛し一吼聲



統一主義

勸信要義

本多日生 口述
山根顯道 筆受

第三節 菩提心の啓發

世間淺劣の事、なほ立志堅からざれば成達すべからず、況んや出世無上の一大事を獲得せんとするに、發心確立せずんばあるべからず、蓋し此出世無上の一大事を獲得せんとするの志願を指して、發菩提心と稱す、此菩提心の發り難き事は、始も砂中に金を索るに似たり、人若し此菩提心を發せば、始めて純然の佛子たるを得ん、世尊は此菩提心を發せる人を讚歎して、泥中の芬陀梨華と言へり、菩提心の貴重なること斯の如し、布教の任務は畢竟未だ發心せざるものをして發心せしむるに外ならず、佛敎絶待の教義は固より唯一なりと雖、此發心の門に就ては衆生種々の慾、種々の性、種々の憶想分別あるが故に、之を啓發する方法亦多面多角に岐るゝなり、如來一代縱説横説の設化の如きも、宗祖一代救活自在の化導の如きも、唯是れ未だ發心せざる衆生をして、何れも其宗敎

心の衝動を捕へて之を啓發し誘掖し、菩提心に進ましめ以て絶待唯一の大教義大信念に安立せしむるに外ならず、智者大師、一代藏經の上に現はれたる發菩提心の動機の各方面を、總合し排列して十種を挙げたり、是れ我等の參考すべき教示なりと信ず、固より宗敎心は時代により國土により其動機を異にするに雖も、又古今東西を通じて變らざる人生一般の宗敎動機なるものあり、凡そ布教の任に當るものは、人生固有の宗敎動機と、其時代其國土の人民に發動しつゝある宗敎衝動を吟味して、之を啓發し以て大菩提心を獲得せしむるを要す

智者大師の總合せられたる、十種の發心動機を紹介せん

- (1) 推種種々、理一發菩提心
- (2) 觀佛種種々、相一發菩提心
- (3) 觀種種々、神通一發菩提心
- (4) 聞種種々、法一發菩提心
- (5) 遊種種々、土一發菩提心
- (6) 觀種種々、衆一發菩提心
- (7) 見修種種々、行一發菩提心
- (8) 見法種種々、滅一發菩提心
- (9) 見種種々、過一發菩提心
- (10) 見他受種種々、苦一發菩提心

此十種の菩提心を熟覽するに、第一の「推種種々、理一發菩提心」

心正とは、即ち推理的宗教心にして、近代哲學の勃興に促されて、哲學的理性の満足を得るの宗教を求むるが如きは、全く此種に屬す、之を佛教内の教理に就て約言せば、真諦俗諦の二諦に分ち、俗諦に苦諦集諦の二を立て、真諦に滅諦道諦の二を立て、以て相待界と絶待界との真相を教ゆるものにして、之に生滅と、無生と、無量と、無作との四種を分ち、之を次の如く三藏教、通教、別教、圓教に配す、是れ佛教の推理的教義なり、之を他面より見れば宇宙觀となり、人生觀となり、佛陀觀となる、尙ほ法華に於て諸法實相の二印を示すに至りては、苦集滅道の四諦も有諦、無諦、中道第一義諦の三諦も、俗諦真諦の二諦も、悉く此一印に歸す、涅槃經に云く「言ふ所の二諦とは其實是れ一なり、且らく如來方便して衆生を化せんが爲めの故に、説て二となす、譬ば日月は轉せざれども醉る人の轉すと見るが如し、當に知るべし唯不轉の日のみあり、醉る人は同く見る、豈別に廻轉の日あらんや若實に轉する日あらば醉るの人又當に並に見るべきなり、一諦は眞の日の如く、二諦は轉する日の如く、眞の日は審實なり、一諦と名くべし、轉する日は實ならず、何の二諦あらん、方便して二と説く、實の義は成せず故に諦に非ざるなり」と請ふ醉へる人聖語を信せば即是れ醉はざるの人、佛教の妙茲に在り

第二の「觀佛種々相發菩提心」是は即ち佛陀の形益な

れ實相なり、實相法界具足して滅することなし、斯の如く一々の相好即是れ實相なれば、絶待無限の全界を全ふして即是れ相待有限の佛陀格を有す、此絶待身と相待身との不二なる處、眞に佛陀論の妙處なり、之を法華經に示す處の淨法身となす、上來記述する處の四種の佛陀格に於て、其見地分明ならざるるときは、此第二の佛の体相によりて發心せしむるの道塞がるべし、是れ最も重要な教義なれば、各論に至りて更に詳説する處あるべし

第三に「觀種々神通發菩提心」とは、佛陀力用の一部なれども、佛教の經文の字面には、到る處に此神通によりて發心せる事を示せり、之を廣義に解する場合には、神通は即力用なれば、佛陀の力を研究して起る所の菩提心なり、然れども前の第一推理發心、第二佛の体相を見ての發心に比すれば今日に於ては部分の說なり

第四の「開種々法發菩提心」とは、佛及び善知識に隨かひ、若くは經卷に隨ひ、四諦三諦二諦一諦等の法を聞き、或ば種々の因緣譬諭言辭によりて起す處の菩提心なれば、今日の文書傳道又は演說布教等の緣に接して、發心するものなり

第五の「遊種々土發菩提心」とは、淨土の体相に就て發心するものを言ひ、第六の「觀種々衆」とは、佛子の先達の智徳に感じ、第七の「見修種々行」とは佛子の種々

り、佛の在世にありては佛の勝妙の体相を見て菩提心を發起す、其形益の四大別を知るを要す、是は佛陀論に就て起る重大問題にして、佛滅後の論釋の大部分は此研究に外ならず、然れども智者大師の如く、秩序整然として佛陀論を綜合し歸一したるものならず、此智者大師が綜合歸一したる佛陀論の精要を提げ、一段の發揮をなしたるものを我聖祖日蓮となす、佛陀形益の四大別とは、一には頭陀の劣應身なり、二には勝應身なり、三には報佛身なり、四には法佛身なり、第一の頭陀の劣應身とは、即ち歴史的の父母の生身にして、身相炳著にして明了に處を得たり、輝麗灼爍として毗首羯磨も作る能はざる處、轉輪聖王に勝れて、相好纏絡し世間に希有なり、天上天下に及ぶものなし、二に勝應身とは、相好の相好にあらざるを知り、如來及び相好皆虚空の如く、空中佛なし況や又相好をや、如來は如來にあらずと、見るは、即如來を見るなり相は相にあらずと見るは、即諸相を見るなり、斯の如く無相の佛陀を勝應身となす、金剛般若經の佛陀論の如きはなり、三に報佛身とは、若し如來の真相を見れば、一切現せざる處靡し、明淨の鏡に衆の色像現するが如し、一々の相好凡聖其邊を得ず、梵天其頂を見ず、目連其聲を究めず、斯の如く普遍應現の佛陀を報佛身となす、四に法佛身とは、若し如來を見て如來の智深く罪福の相を達し、遍く十方を照すに微妙の淨法身相を具し給へること三十二、一々の相好即是

の行法を實修するを目標し、之に刺激せられて發心することを云ひ、第八の「見法種々滅」とは、宇宙萬象の遷滅無常を見て深く之を思ひ發心するを云ひ、第九の「見種々過」とは、他の種々の罪惡を犯し殘忍無道の有様を目標して、却て自己の善心を起し發心するを云ひ、第十の「見他受種々苦」とは、他の種々の苦役せらるゝを見て、自己の善心を起し發心するを云ふ

以上十種の發菩提心は、我邦國の間に於ても確かに發心の動機たるべきを知るべし、祖書國家論に起信に二大基礎を示せり、一には「就佛立信」、二には「就經立信」と云ふもの是なり、此教示の如きは、先づ大乘釋迦牟尼佛を智慧無上の佛陀と仰ぎ、此佛陀の爲に信を起し、又此佛陀が其本懷を法華經に顯發し給ひたれば、此法華經に歸順して信を起し、此佛陀と法華經とを發心の基礎となせよと云ふにあり、是れ固より縱容の教訓たるに相違なしと雖も、宗教心發達の各方面を考察せば、此教訓の如きは僅かに其一面を示せるに外ならず、若し廣く祖書に現はれたる勸信説を調査し來らば、其應用設法の周到圓滿なる、當に智者大師が列擧せる十種の發心に止まらず、種々難多の宗教動機を捉へ、巧みに之を活用し來りて、無限絶待の大信念中に向はしむるのあり、後節に至りて之を示さん

の智徳に感じ、第七の「見修種々行」とは佛子の種々

第四節 勸信は壓迫するよりは能く消化把住

せしむるを要す

宗教の信念を勸むるに就て、種々の方法ありと雖も特に注意すべきは、他の思想を壓迫して信仰を強ゆる方法は最も非なり、先づ其教義の内容を鮮明にし、他をして能く之と意識せしめ、而して其教義の精粹を把住せしむるを要す、從來佛教徒の取り來りし方法は、多く壓迫の傾向を有す、則ち佛云く宗祖曰く等と佛祖の語擔をき來りて、他に之を信すべき事を強制せり、而して自己は其經釋を意識するにもせよ、他は一向に其言句すら解せず、唯々壓迫によりて信仰を存續せり、毫も他の之に對して其内容を意識せりや其精粹を把住せりやを思はず、又或ものは、妄りに开は罪障なり業報なり等と威喝するのみにして、其佛教の罪福論の根底に於ける妙味をも、因果論の終始を貫ける條理をも消化せしめず、故に其信念の意識情態を解剖し實見せば、多くは外道婆羅門の邪見に陥れり、殊に我宗の信念成佛の教義の如きは、壓迫主義にては得らるべきにあらず、何となれば我宗の信念は、善量品の教旨に對して感發したるの信念にあらずれば不可なり、若し唱題成佛を取らば壓迫にても可ならんかなれど、信念の至誠を以て成佛の正因と定むるが一宗の正義なれば、壓迫的方法を去て、啓發的化導を取らざるべからず

各面評論

日蓮 各派比較評論 (承前)

第二節 天目の所立を論ず

先づ天目上人主張の要點を擧げ、而して後之を評論せんは本迹決要抄下(日澄著)に天目著圓極實義章を評論せる一段に曰く

大聖人御入滅已後、連々に四老僧を誅ひと雖も用ひられず、其後永仁五年三月十七日に右衛門太夫に就き、彼老僧等を畔めて天目の云ふ様、大聖人の御書數百卷有之、一同に一所に會合して、大聖人の元意に就て一同に本門の三大秘法を弘通すべし

又曰く、彼人々尙は用ひられず、其後正安二年(宗祖滅後十九年)五月十日より已來、天目身命を惜まらず散々に老僧等を破する也、彼老僧達曰く、本迹に勝劣なき故に本帥上人は朝夕の行に本迹併せて行と給ふと云云、天目は御書に任せて末法惡世の初心の行者なる間、爾前迹門の惡法を捨て、一向に本門純善の大法を行する也、適時適機なるのみ、逆臣の旗を以官兵は指す事なし、寒食の祭には火を禁ず、本門流布の障害は爾前迹門の法是也、尤も今末法の機に禁

制すべきか

又曰く、本門法華宗の人は、末法の時に相應し朝夕の行儀を保ち、一向に善量品を讀誦して以て助行と爲し、妙法蓮華經の五字を唱へて正行と爲すべし、助行の中に於て雜へて迹門方便品等を行すべからず、問方便善量の兩品を讀で助行と爲すべし、何ぞ一向に善量の一品計りを用ひて助行と爲すや、若彼迹門は像法の時機の爲なり、今末法の時機に當らず、譬へば去年の曆の如し、故に用ひず、善量の一品を費んで助行となし、方便品を用ひざるなり云云

因みに勝劣主義を主張せし人の順序は左の如し

- (1) 六老僧日興上人(興門派祖)
- (2) 上法房天目上人(迹門無得道說 品川妙國寺開基)
- (3) 中老日辨上人(迹門無得道說 上條警業開祖) 日法上人(圓宮光長 寺開基)
- (4) 日什上人(妙滿寺開山)
- (5) 日陣上人(越後本成寺)
- (6) 慶林房日隆上人(八品派祖)
- (7) 日眞上人(本隆寺)

此中(2)(3)の二は今は跡絶へたり

今之が評論を試みんに、本迹に於ける一致勝劣の紛議は、今日に至る迄各派の間に盛んに主張せられ、我宗歴史上の大部分は此問題に依りて埋められたるもの、如し、而して其起源は、遠く天台宗の惠心權那兩流の衝突にありと雖も、我祖日

蓮上人明晰なる斷案を下し給ふが故に、若し執見を離れて公平に祖書と拜讀せば、又何れの處にか本迹一致勝劣の争ひと生せんや、然るに我祖入滅の後此厭ふべき紛議を起したるは全く祖師の遺文各處に散在し容易に本化の宗學を遠觀するを得ず、茲に於て乎祖教の一側半面をして、相互に異見と生じたるに外ならず、蓋し今の紛議の源流は日興と五老僧との間に起りたりとの説あれども、予は思ふ、天目の勝劣の説日興に先立て顯はれたるものならんと、其年代は我祖滅後十九年即正安二年庚子五月十日なり、此年時は天目の圓極實義抄中に記する而已ならず、日向の天目問答記録にも掲ぐる處なり、其記録の語は哲蒙十八(八十一丁)に出たり、曰く、本迹の法門は上人御入滅十九年を経て始めて出來すと、以て知るべし天目勝劣の説は、滅後十九年に起りたることを

今天目の主張を評するに、彼が不讀迹門の説案より偏見たるを免れずと雖も、彼が「御書に任せて末法惡世初心の行者なる間、爾前迹門の惡法を捨て、一向に本門純善の大法を行する也云々」との意見は、又味ふべきの價直なきにあらず、何となれば迹門を讀誦の行に用ふる所以は、本門の助成なるが爲にして、樹想還生の失なしとなすが故なれば、若し迹門を讀むが爲に本門の意義を動搖し、若は紛亂せしむる場合には斷然之を退く可きなり、而して爾來一致派なるもの、主張と實際とを檢するに、全く本門の教義を障害し、明かに樹想還

生の失に陥れり。之を以て之を思へば、批評眼の上より天目の主張を採用したりとせば、斯る雜亂極まれる宗門とはならず、又紛々擾々たる本迹の論争を杜絶し、依て以て我宗義の發揚を對外の方面に導き得て、宗法の發揮今日に十倍するものあらんか、又天目が其意見を發表するに當り、十有九年の間其所見を練り、且つ四老僧に書を送り、大聖人の遺書を悉く一處に集め、相會して教義の見解を統合し、以て異株同心に本門の三大秘法を弘通すべしと主張せる處、其用意の慎重にして我見の僻なく、又着眼宗旨の三秘に向へるもの、眞に敬服に堪へざるなり、從來天目を目して一概に偏狹者流と評せるは、蓋し失當の言ならん

今や本迹論の起原に就て着眼を要するものあり、并は其論争の述門の讀不讀に始まりたる事是なり、彼の理融一致の説すら、其己後に起りたる本迹説たることを記應すべし

(以下次號)

日蓮門徒の帝國主義

帝國主義とは領土擴張主義なり、勢力範圍伸張のうれなり、吾人は帝國主義の意味を斯く觀しつゝ、吾人日蓮門徒に確に斯の如き思想の存在せるを信し、茲に日蓮門徒の帝國主義を論せんとは企てし也。

はむしろ第二の位置にあり、進んで取るとは、いふまでもなく折伏主義也、一天四海皆歸妙法を根本理想とせる折伏主義は、尤も明白に大膽に發展せざる可らず、是やがて政治的帝國主義が宗教的帝國主義に變形せんとする素地にして、折伏主義の實地發展は帝國主義をして宗教的に歩一歩築きあげるの階段也。

且夫宗教上の版圖は無制限なり、近世の政治學者は主權と領土と臣民との三要素揃ふにあらざれば完全なる國家として許すべからずとするも、うは政治上國際上の國家の定義にして、此に依れば領土は明かに制限せられ居るも、若夫宗教上の版圖に到つては、絶對的に無制限なりといはざるを得ず何となれば宗教の事たるや、夫自身が既に人間内界の事に属し、それが宗教的意識は何人も左右し得べからざる處なれば也、是近世世界の憲法が信教自由を規定する所以にして、近くは露帝が信教自由の宣言は、新らしき譽を人間の信界に傳へたるにあらざるや。

既に然り、宗教上の版圖は無制限なり、之に依て是を見れば吾人日蓮門徒の折伏主義は如何に自由に如何に大膽に發展せらるべきにあらざるや、一天四海皆歸妙法の根本理想は容捨なく實現せらるべき餘地あるにあらざるや、宗教的帝國主義は如何に歡喜と満足との聲を以て遂行せらるべきにあらざるや、

近く世界に於て帝國主義の尤も明白に實現せられたるものを吾人は是を東洋の老帝國に於て見たり、東洋の老帝國とは謂ふまでもなく支那帝國なり、嗚呼老餘衰殘の老帝國、彼は終に世界列強の其國民が抱ける併呑主義侵略主義の爪牙の爲に名を貸借にかり、保存に設けて、あらゆる要所をブタンデーに醉へる將軍の馬蹄にふみにじられたり、雷に一時にとまらず永久にふみにじられんとする趨勢にあらざるや、露の滿州に於ける態度を見ずや、獨の膠州灣に於ける態度を見ずや、其他佛に、英に、以太利に、彼等は尤も明白に、尤も大膽に、其領土擴張主義を遂行したり、吾人は今更ながら軍隊力を控へたる外交問題の強大なる成功に驚かすんばならず、此支那に於て實現せられたる領土擴張主義は、すぎし十九世紀が最後に遺したる一個世界的問題にして、政治學者は此を形容して帝國主義といふ、

帝國主義、

吾人は此語をさくとき、如何に強大なる響と感ずるぞ、東洋の老帝國に於て政治的に經驗せられたる帝國主義は、其他の意味に於て其内容と伸張する事能はざるか、然り帝國主義は政治的に經驗せられたるに止まらずして、更に大に宗教的に經驗せらるべき也、特に我大日蓮の宗教に入りて確に經驗せらるべき一大主義也、

想ふに日蓮門徒の理想は進んで取るにありて、退て守る

吾人日蓮門徒の帝國主義は斯くして進歩發展せらるべき運命と有するも、吾人は先何れの方面に向て其發展を試むべき吾人は露西亞となりて滿州と何處に求むべきや、吾人は獨逸となりて膠州灣を何處に求むべきや、抑も吾人の支那は何處にありや、然り吾人の支那は眞宗なり、淨土宗なり、曹洞宗なり、眞言宗なり、天台宗なり、更進んで基督教なり、回々教なり、ラマ宗也、吾人は總體論としては殆んど總ての宗教に向て吾人が帝國主義を發展せしめんとするも、且く特別論としては眞宗を以て今の所謂支那となさざる可らず、何となれば其老餘衰殘せる點に於て、其危然雜然たる點に於て、頗る支那に類する處あれば也、されどこは彼か半面にして、其他の一面には時代智識の白衣を纏ひ、大學中學をも自から立て、多くの子弟を養ひ、而して其頭髪の匂いと高襟の白さに新博士新學士の面影をほのめかすに到つては、吾人不敏と雖も三たび思ひを致さざる可けんや、彼は確に眼を醒したる支那也、東洋の老帝國は世界列強の刺激に逢ひ追害に逢ひつゝ、猶未だ目と覺さざるに、海を隔てたる日本に於て支那に似たる一宗教國は早くも自覺時代に入れり、眞宗の老餘衰殘せる一面に向ては吾人は消極的念佛無間論を以て易々たるも自覺時代に入れる一面に向ては積極的念佛無間論を提げざる可らず、世界列強が老餘衰殘の支那帝國に向つて試みたる帝國主義は尤も容易に奏功したるも、否むしろ列強か軍隊力と

自由競争の熱どか熾んなりしに比して餘りに手答なく餘りに無事に功を奏せしめたり。今や吾人の所謂支那は世界に併呑せられんとせる危機に瀕せる支那にあらずして、むしろ宗教世界を併呑せんと企てて起せる支那にあらずや、吾人が積極的念佛無間論は、彼が他方本願論を粉砕せざる可らず、時代知識の白衣を纏へる彼として赤裸々たらしめよ、然り吾人が帝國主義と實現すべき一大版圖は吾人をして餘りにたやすく何事とも遂行せしめざる也、若夫一たび起て帝國主義の實現に努力せんか彼は確に手答ある也、然れども思へ吾人は竹揚子を以て豆腐を切つて得々たるよりも、むしろ一大鐵鎚を以て堅き巖と碎くの愉快にして壯絶なるを覺ゆる也。

折伏主義の中につゝ、まれたる帝國主義の蕾はゆく／＼開きつゝあるにあらずや、而して此蕾の殆んど總てか開き了りたる時は、吾人日蓮門徒の根本理想たる一天四海皆歸妙法が名残なく發展せられたるにあらずや、吾人は斯の如き結論を理想して先づ何れの方面に滿洲を求むべきや、膠州灣を求むべき吾人の備前法華は露西亞となりて眞宗に於ける安藝門徒の滿洲を永久に占領すべきか、吾人の上總七里法華は獨逸となりて眞宗に於ける三河門徒をして南無妙法蓮華經の洗禮を受けさしむべきか、北越三州に於ける眞宗の勢力は孫弟日像か布教の勢力範圍と徑庭の差を生じつゝあるにあらずや、北越に於ける吾人は英たらざる可らざるか、佛たらざる可らざる

るか吾人は終生鐵獸と守りて突差直ちに侵略主義に出づる露西亞たらざる可らず、吾人は剛健にして果斷、執心深くして熱望あり事ある毎に武力を用ひて敢て憚らざる獨逸たらざる可らず、吾人は其版圖に光明のみありて暗黒なき即ち晝のみありて夜なきてふ英吉利たらざる可らず、吾人は外交辭令に巧みにして而も同時に世界統一と企てたる大ナポレオン小ナポレオンの出現したる佛蘭西たらざる可らず、吾人はかく佛たり、英たり、獨たり、露たりして、而して吾人の支那に向て帝國主義を行はざる可らず、積極的念佛無間論を唱導し、鼓吹し、欽仰せしめ、首肯せしめざる可らず、吾人の支那は今や新舊思想の衝突時代にして、餘りに多く吾人をして乗せしむるの機會を與へたり、火は何時にても點せらるゝ也、否最早點せんとする準備のなりたるを告げ來たりつゝあるにあらずや、危機は迫れり、吾人と彼との間には一大覺悟なかる可らざる也。

帝國主義を理想とせる日蓮門徒の支那は、眞宗なり、淨土宗なり、曹洞宗なり、眞言宗なり、天台宗なり、更に進んで基督教なり、回教なり、ラマ教也。されどは總體論なり、今は特別論に入らざる可らず、特別論に入れる支那は眞宗也。折伏主義、あゝ如何に壯絶なる響を傳ふるぞ、帝國主義、あゝ如何に強大なる響を傳ふるぞ、

一天四海皆歸妙法の根本理想は如何に世界精神上の統一主義として哲理的・道徳的・宗教的の意味を以て、永遠より永遠に新らしき響を傳ふる如何に絶高の主義にあらずや、吾人は如上の意義に於て、吾日蓮門徒が百尋千尋の谷底へおとし入れられたる獅子の子の如く、奮然としてふるひ立たむことを熱望してやまざる也、(不新)

宗教文學

日蓮大聖人 (第六回)

佛城 關田養叔 講演

光陰は矢の如しと申しますが、月日の經つのは誠に早いもので御座います、藥王鷹が清淨寺へ参りましてから春と明け秋と暮れまして、早や嘉禎三年と相成り、藥王鷹本年十六歳、此の年の冬十月八日、いよく髪を剃りし、佛の御弟子の數に入るといふので、道場を淨め、御師匠の道善密師は自ら導師となり、山内の僧達を集めまして、御經を誦げ梵唄を唱らし、この外萬事、剃髮得度の儀式いとも嚴かに執り行ひます、藥王鷹は兩掌を合せて其の聲も潔きよく「藥王鷹無爲眞寶報恩者……」と此の文を三遍

唱へますと、こゝに翠滴る、黒髪を剃り落し墨染の法衣を身に纏ひまして、御名前をば是生坊蓮長と改めました、蓮長師は此れより専ら佛道修行に心を傾けまして、眞言密宗の奥義を尋ね、教相には眞言三部の御經や其の外の諸論を學び、事相には求開持などと申して護摩を焼くことや指に印契を結ぶこと等を相承いたし、夜となく晝となく僅少の時間をも惜むで勉強いたし、殊に澤山御弟子仲間のある中にも法兄の淨願義淨の二人をば學問修行の相手として、頻りに苦學を致します、次第々々に勉強を積み、今や一切經を讀み初めました、

一切經と申しますと、御釋迦様が八萬四千の法門を御説き遊ばしたといふ廣大なもので、其數が七千三百九十九卷ほども御座います、これは御釋迦様が一代五十年間の説教を書き記したもので、第一が華嚴經、この御經は、釋迦如來が天竺の淨飯大王の太子と生れ御年十九にして出家を致し、難行苦行十二年の後、御年三十歳にして佛の道を成し、寂滅道場といふ處に於て、一番最初に、三七日の間説かれたものである、此の次が阿含經で是れは十二年の間の説法、第三に方等經で十六年の間に説き、第四に般若經これが十四年、以上これ迄で四十二年間の説法になります、第五番目に釋迦如來御年七十二歳の時に靈鷲山に於て八ヶ年の間御説き遊ばしたのが、私共の日頃讀みます所の法華經であり、これに引き續

いて佛陀御年八十にして御涅槃に成らうとして、阪河堤のは
どり阿純陀が家に於て後世の爲めに御遺言として一日一夜の
間説かれたのが涅槃經と申します、初め華嚴經より終り涅槃
經に至るまで都合一代五十年の説教をば總じて一切經と名け
ます、

連長法師は晝夜寝る目も寝ずに肺肝を碎いて次第に一切經
を讀んで参りますが、茲に端なくも一個の大なる疑ひを起し
ました……其の疑念と云ふは「元來、佛法といふものは、
大恩教主釋迦牟尼世尊が、一切衆生を救ひ助けんとの大慈大
悲の思召より、何卒して迷ひの煩惱を除き佛の正覺を開かせ
たいと云ふ所から、説き出されたもの、されば説き出した本
師は御一人であるから亦其の説かれた法門實義と云ふものは
畢竟一つに統歸らんければならない、所が、今の状態を見る
と八宗十宗と色々に分れて居て、各々みな手前味噌を
堅め、眞言宗でも禪宗でも淨土宗でも何宗でも勝手氣儘に自
分の弘る宗旨を自慢して、我宗こそは釋尊の本意を得たるも
のだと、互ひに他を誹りて已れを讀め、我が佛が尊いのだ我
法が有り難いのだと云ふて居る様な譯だが、抑も御釋迦様は
何宗なるぞ、眞言宗なるか禪宗なるか又は淨土宗なるか、夫
れども諸宗兼學であるか、天に二つの日なく大海の潮水に二
色の味は無い、苟も一人の佛の説教に於て今の諸宗が、互に
角を出して喧嘩をする様に、水と火の如くなる矛盾ふた教義

のあるべき筈はない、斯は如何なる譯である乎……』とい
ふ疑問である、
日蓮聖祖が、佛法研究の最初に於て此の疑ひを起しました
のは、眞に至當な譯で、大底諸宗の祖師方と云ふものは、自
分が初めに學び受けた佛法に心酔して了ふて、これを土臺に
して割り出して行きますから、最初の算盤が違つて居ると終
局までケタが逸れて了ふのです、これに反して日蓮聖祖は、
初めより大なる疑ひを起して研究をした、自分が最も關係の
深い眞言宗迄も疑問の中に入れて了ふた、謂ゆる自由討究主
義である、夫れ故に、情實に流れるの心酔するのと云ふこと
は無い、此處が日蓮聖祖と諸宗の祖師方とが大に違ふ點であ
る、實に斯くなければ眞直な公平な正しい議論は出てまいり
ません、

連長法師が、斯の疑念を起してからといふものは、佛敎研
究の眼光は倍々牙へ、鋭い上にも鋭くなりまして、此の疑ひ
を晴さねば、佛法の眞の味を嘗めることは出来ない、成佛
の大事を悟ることは出来ない、佛陀の御精神を窺ふことは出
来ないと、夜となく晝となく思念を此點に止め、疲れては机
に眠り覺めては經文を讀み、一生懸命に勉學を致し、遂に
は、此の清冷山に安置してある虚空藏菩薩といふは、東方莊
嚴世界の教主にして、一切衆生に智慧を授け給ふとのこと
で、大集經の中には、諸の衆生の心行を分別けて智慧を増し悟覺

を明かにせしめると有るからは、我れも爰に祈願を凝さんも
のど三七二十一日の間、御堂に御籠りを致し、湯水を絶ちま
して一心不乱に……「師くは、我れをば日本第一の智者と爲
して給へ、佛の正智恵を得て諸宗の是非を糾し、如來の御本
意をば世に顯はし、廢れたる佛法をば再び興こし開路に迷へ
る一切衆生をば濟ひ出さん……」と祈誓を致しました、今
日で二十一日といふ満願の日の曉方をろに至り、一心に思ひ
詰めたる疲勞か神魂も恍惚として夢現の間に、誠にどふも尊
げなる一人の高僧が顯れまして、右の手に眩いばかりに光り
輝く一つの寶珠を持ち「汝が祈る智恵と授くるぞよ」と此の
寶珠を興ふれば、連長師は、奇異の思ひを致しまして右の手
に此の珠を受け左の袂に収むる折しも……颯と吹き來る山
下しの風に、四面を見廻しました、別段人も無く……

「さては今のは靈夢なりしか……夫れにしても不思議なの
は今日の満願の日に……さながら我が衆生利益の大願は
三世十方の諸佛も納受し給ふであらふ……」と、これより
本坊へ歸らんと致して御堂の石階を三四段降りますと佛法修
行のために思ひを焦し胸を痛めたる故か、俄に胸元が苦いと
思ふ間もなく夥しき血を吐きまして、其の儘氣絶を致しまし
た、同寮の所化等が、此の有様を見て大に驚き、直に本坊の
方へ擔ひ歸りまして介保を致しますと、忽ち夢の醒めたる
如く、御躰元の如くに相成りました、現今でも、御祖師様が

氣絶をして血を吐いたと云ふ場所へ、血が染つた様な笹葉が
生ますのを後世凡血の笹と言ひ傳へて居ります、日蓮聖祖が
後に八宗九宗の學問を悟り究め、これは正しい是れは邪だ是
れは眞直これは曲つて居ると、明かに裁判を下だし、連長、
弘法、法然等の諸宗の人師論師をば、佛法を死したる師子身
中の蟲なりと言ひ、御身自らは、眞の佛法を以て人類を救は
んことを思ひ立ち、日本國の一切衆生の主人なり親なり師匠
なりと云ひ、日本第一の法華經の行者なりと名乗られたる、
偉大なる御氣性は、既に己に「我をば日本第一の智者となし
給へ」と言はれたる此時に顯はれたるものである、要之この
御氣性が初めより終りに至るまで御一生涯の間を支配したも
のと云ふべきである、

倚門

(松尾忍水の都を去るを送る歌)

不新

都の春をよろにして
遠く他卿にいゝでゆく
友の心ぞいふかしな
一たひ筆をふるひては

宇宙の奥義うたひけむ
其名はどわにひけるに

戀かあらずか世のちりの
うれといとひてゆきますか
さてもとさ得ぬ旅路かな

うれよ別れの酒くんで
戀を語れと強ひし時
たゞ母ありと答へしが

うれしからずや吾友の
都をよろの旅立は
母にわひます幸あるか

いなく友の旅立は
更にゆかしきことぞある
笑ひ玉ふな我友よ

薄紅色のうつくしく
水くきの跡たへ〜に
ちらと見へにしそれやなに

山里の春はおうらうして

桃も櫻もともにさく
其處に戀あり我友の

さては逆境の旅ならず
よし今茲に別れても
友と我とに平和あり

春のゆくへと追ひゆけば
蝴蝶を獨り乱れ舞ふ
かくと謠ふは友の聲

酒もつきたりこゝにして
よし我が爲に泣き玉へ
我もそゝるにかくうたふ

あゝ旅立てる我友よ
母と戀とに悶へても
都の友をわするゝな

よしゆきますか我友の
破れし袴の其處此處に
慈悲の光明天くだれ

(完)

天香下田先生寄詩被求和

一體三衣遍十方、 新心好與世塵忘、 東台曾入修羅域
南岳初登選佛場、 湖海多年空落拓、 酒詩何處不清狂
相逢今日問陳迹、 唯說法門無盡藏

謹和玉礎

未學長生辟穀方、 紛々世事半相忘、 百千經卷繁臚極
五十人生遊戲場、 於野於官常落薄、 于詩于酒奈疎狂
如今相見唯慙愧、 霸氣從之能退藏

針間 紫山 松平 五峰

妙乘旅行感慨記(承前)

影山 謙二

八

方今、舉世滔々として、西哲一派の功利主義に感溺して、我國古來、歴史と共に發達して、大和民族の人文史を貫申せる、唯心的道德主義を一朝に破棄せむとする、醉西一知半解の歐化者流を惡むや切也。予は、旂れを惡むと同時に、其反動として、一面また先人の美德を追慕し、美風と羨望して止まざる也、偶々赤穂に遊び、義士四十七人が、當年忠勇義烈の壯舉に想到し、感慨をた、現りに一層深さを覺ゆ、乃ち同行井上君を起して、其庶所に墳墓を展す。墓は、赤穂加里

屋町の繁街、華岳禪寺に在て、淺野公の廟と同列せり、予や親しく墓前に跪き、唱題數遍、以て其か地下に眠れる英魂を吊ひ、委細に碑銘を凝視し、又周圍を還顧するに丁りて、圖らず、快哉を三呼したるものあり、何ぞや、妙なる哉諷稱、警なる哉諷嘲、忠臣大石氏の墓前には亭々たる一株の櫻樹を植へ、其樹下に「忠義櫻」と刻みたる標石を建て、不臣大野(所謂、九太夫)の墓前には歎々たる一株の楊樹を植へ、其樹下に「不忠柳」と刻みたる標石を建てたる褒貶の配當、寓意の趣向これなり、於戲、櫻なる哉々々々々、「み芳野の春の曙みわたせば唐土人も高麗人も大和心になりぬべし」と歌ひし古人の國風も、直ちに移して此所に誦すべきかな、茲に於て想起す、義士が復讐當時の狀、史を案づるに、當時、憲府當路有司の間には勿論、天下諸方、有識具眼の者を通して、甲論乙駁、一上一下、互に大石氏以下四十七士の擧を是非し、正邪曲直の斷、當分容易に決すべくもあらざりしが如し、乃ち荻生徂徠の如きは論して曰く、「長矩一朝の忿り其祖先を忘れ、而して匹夫の勇に従事し、義典を殺さむと欲して而も能はず、不義と謂ふべきなり、四十有七人なる者、能く其君の邪志を繼ぐものといふべし、義といふへけんや」と論して、大に四十七士を貶す、室鳩巢聞て之を不可となし、竟に「義人録」を著して、四十七士の爲に大に辨づる處ありしと雖も徂徠派の學者は、徹頭徹尾、非義となし、中にも太宰春臺の

如きは、鳩巢の義人録を見て、之を駁して曰く「室氏にして義と知らざることは、如くなれば、世の慣々たる者何ぞ論するに足らむ」と放言するに至りたるか如き、以て兩々二派抗論の何に劇甚なりしかを想見すへき也、蓋し、當時幕府の政道、殿中に於て抜刀するを禁したるは勿論、京都、江戸、大坂、駿府、將軍の廟所、等の地に於ては、縦ひ許可を受けたる仇討たりとも、之を果行することを禁制したりし也、然るに彼れ四十七士は、仇討に就て當局の許可を受けざりしのみならず、將軍朝府の族下に於て、而も代々高家として格闘的に重用せられたる吉良の邸第に闖入して、大々的修羅場を演しかることなれば、素より大に政治上の秩序と破壊し、國家の公安と紊乱したるや論なし、去れば、當時幕政の樞機に參與したる徂徠、乃至うの一流が驚々然として、極力、大石氏等を指弾したるは、苟とに人情に免れ難き、執我の迷見に坐したるものにして、實に、大儒徂徠の爲に、千載の遺憾となす、鳩巢に至ては、眼中、區々たる時流當代、一期の煩瑣なる、幕府の律制圏内に踞踏することを屑しとせず、卓然として、一時的法律規則の上に超絶し、一ら念ひを古今五常の大義に潜め、力と社會道徳の維持に注ぎ、終始、忠の一字を以て四十七士の行爲を論辨したるは、實に千古の卓見にして、千載不動の大確信と謂ふ可き也、さればにや、徂徠派の局時的管見は、世の推移と共に、地上に委して、また半銭の價

紅蓮白蓮

法衣と著せる悪魔

末法の僧侶は法衣を着せる悪魔なり、否權教所執の類は法衣を着せる悪魔なり、否更に權祖門下に属せる或者は、所謂法衣を着せるの悪魔なり、或人は吾人の斯言を恠み、亦或人は之を怒るべしと雖、忌憚なく吾人をして謂はしむれば、其多くは法衣を着せるの悪魔たるを、實に免かる能はざるを信す、

雜寶藏經云、昔如來樹下、惡魔波旬、將八十億衆、欲來壞佛、佛云、是即釋尊菩提樹下に於て、正に大覺開悟せられんとするに際し、惡魔波旬の衆を將ひ來つて、佛陀の大悟を妨げんとせる、其狀態を示されたる文なりとす、

佛在世の惡魔波旬は來つて、佛を壞らんと欲すれども、滅後末法の惡魔は僧伽の形を粧ふて、而も其門下に身を委し、隙に乗して正法正義を壞らんとす、恰かも彼の邪見に著樂して一切賢聖の涅槃の道法を憎嫉する、欲界の天主魔の如しと謂ふべし、

實に畏るべきにあらずや、此の法衣を着せる惡魔、而して權教權門の類は、固より惡魔たるは既に定論あり、所謂大

値をも留めざるに反して、鳩巢の學見および主張は、百載の後、今日尙ほ活きて人心の感化に應ず、大石氏等の義舉を讃する者は、一面に復た鳩巢の識見と確信とを多とせざる可からざる也、論して茲に到る、嗟呼實に、人間に最も貴ふ可きものは、確信の二字なる哉、願ふに、吾人本化の御門下たる者、須らく、聖祖の遊ばされし「我大願を立てん、日本の位を譲らん觀經等に付て後生を期せよ、父母の願をはねん念佛申さずば、なんぞの大難出來すとも智者に我義破られずば用ゐるとなり、其外の大難風の前の塵なるへし、我日本の柱とならん、我日本の大船とならん、我日本の眼目とならん」と誓ひし願破るへからず」底の大々の御確信に同化し奉りて、紛然亂麻の如き宗界を繩すこと、恰も四十七士が、義に仗り身を忘れて、吉良義央の罪を亂せしか如く、爾く不自惜身命なる可く、又、正師先輩の主張に應同して正義の發揚に力むること、恰も鳩巢が、道に據りて權門に阿附せず、毅然として一世の邪說に反對し、以て知己を百載の後に待ちたるか如く、爾く但惜無上道ならざる可からざる也、これ、正義が最終の大勝利なること、實に古今不變の通理なるを知れば也

(未完)

直道を障害して、本覺の寶都に到達せんと冀ふ吾人を、其中途に疲息せしめ、退還せしめんと計るが故に、然るに此種の魔族を降伏せしめたる、強力の轉輪聖王の幕下に列せる、吾人一門の領境に衣食し、其正法正義の大旗を扇揚せんと、企圖畫策しつゝあるものに向つて、密かに妨遏を恣まはせんとす、之れ吾人の法衣を着せる惡魔にして、大日蓮の門下に属せる處の、頑迷固陋なる舊思想派の一輩なりとす、

るも、舊思想派に属するの族らは、時世の變遷進歩の状態なるもの、亦も如何なるものなるやを解せず、随つて宗教宣傳の方法に就ても、唯舊套を墨守するのみに止まり、以て敎家の任務を果せりと爲して、大に得意の色あるもの、則ち株杭を守つて脱兎を待の痴を學ぶもの、我大日蓮の門下に於て、蓋し幾百人の多きに居るや、未だ以て知るべからざるなり、

然るに時世の推移は分秒も止息せず、刻一刻に進運の道程を歩めり、吾人宗教家も又之に適應せる、宣傳の方法を擇ぶべきは、論するの要なしと雖も、彼の所謂舊思想派なるものは、更に顧みざるのみならず、時機に適合せる敎法宣布の方案と却つて障害せんと試みるに至る、吾人の法衣を着せる惡魔を以て呼ぶも、豈過言なりとして咎むることを得んや、

吾人が常に叫びつゝある處の、佛敎統一の大問題も今や世人は耳を傾くるに至る、而して其第一鞭に數ふべき、願本日

宗二教團の合同問題は、倍々佳境に進まんとす、一點護法の志あらんものは、以て慶すべきの快事なるにも係はらず、道路説と爲すものありて、屢々吾人の耳に忌べき響きを傳ふるものあり、實に咄々怪事にあらずして何ぞ、

蓋し此の怪事とは何ぞや、聞かぬれば、願本日宗の合同は小を以て大と合せ、衆を以て寡と結ぶものにして、其損益を推知すべしと謂ふにあり、之れ利害問題より打算し來れるもの、單なる數字の上に計算を試みたるものにして、吾人一顧の價值を認めずと雖、斯かる卑劣なる考慮と有せるもの、大日蓮の門下に於て若しありとせば、之を呼ぶに法衣を着せるの惡魔なりと、吾人は叱咤するを猶豫せず、

又聞けることあり、二宗の合同は先師の冥鑑に背くものなりと、何等愚昧の奇言ぞや、吾人は聞くと欲す其の先師なる人を縱し其先師に背くと假定せんか、所謂先師なる人と大日蓮とは、主伴輕重の差相去こと遠きものあらん、果して然らば宗祖を指て先師に隨はんか、斯かる違法の者あらば、擬するに法衣を着せる惡魔を以てし、吾人は先汝が頭上を望みて一痛棒を加へ、而して其頭腦を粉碎せん、

復更に吾人は聴けり、二宗合同の曉に至らば、本尊勸請の様式及び修行法等、何れかの宗義に服従して、久しき因縁關係を有せる佛神と、廢除撤去せざるべからざるに至るべし、斯くて之を顧みれば、明らかに其何れかの宗旨に降伏したる

ものにして、宗門を恥かしむるの罪に坐すと、嗚呼之れ誤謬の甚しきものにあらずや、顛倒の迷見妄情も茲に至つて極まりと謂ふべし、此の如きもの之れ法衣を着せるの惡魔にあらずや、

其他吾人の耳目に達せるもの、百の多きを以て數ふべしと雖、一括して齒牙に掛るに足らざるを想ふ、然れども大日蓮の門下に於て、近き將來に事實に顯はれんとする、二教團合同の悦ぶべき問題に對して、頑陋なる思想の判斷に依て、之が障礙を爲さんとするものあらば、則ち惡魔の所業にあらずして何ぞや、而して其惡魔たらんも尙且甘んじて、正法正義の發揚を妨たげんとするか、

法華經の行者をば、第六天の魔王の、必らず障べきにて候魔の習は善を障て、惡を造らしむるをば、悦ぶ事にて候、(當本入道)大日蓮の垂訓せられたるものあり、其門下に属する吾人の、脊々服膺すべきの聖誨にあらずや、

案するに派別の妄情は、其根因と數百年の遠きに植へ、爾來法子法孫傳承し來りて、益々根底を深からしむるに至る、此久しき時間に於て、相互法義の勝劣を争ひ、爲に怨みを結べること幾十回、而して吳越の想ひを爲せること、又數百年の間なりとす、然るを幸ひにして明治の昭代に遭到し、社會の反響に接して螭蚌相争ふの、不利を自覺するに至れるあり、

亦新進學者の眞摯なる研究によつて、其歸趨すべき方向を開拓せらるゝと共に、開宗六百五拾年の紀念に際し、一大合同の動機は果然として産れ、正に異体同心の祖訓は實現せられんとす、是れ大日蓮滅後已來の大快事なり、誰か双手と舉て之を讃せざるものぞ、

然るに舊思想に懸着せるものありて、此開かれたる新生面を見聞して、感耳驚心の餘りに之を妨遏せんと試み、宗門の進運を厄害せんとするものあり、吾人の法衣を着せる惡魔と名くるもの、敢て失當にはあらざるなり、

願本日宗の合同は宗門進歩の現象にして親しく大日蓮の本懐に近づけるものなり、吾人は速かに之を事實に活現せしめて、後五廣布の大願に一步進めんことを、日夜に懇到して止まず、否二宗の繩素共に希ふべき處なるを、或人は頑迷なる思想に驅られて、此一大聖業を遮障せんとす、之れ最もも誤れるの甚しきものにして、却つて宗運を災せんと計るに同じ換言せば善を障へんとする、彼の惡魔と擇ぶ所なきにあらずや、

而して此迷想を懐くの一類は、聖祖門下の僧侶に乘くして、反つて信徒に掛なきを視る、若し幸ひにして吾人の所見謬りに属せば、大法の爲に欣舞に堪ざれども、如上陳述し來りしが如き妄情に執し、此大法の慶事と沮害せんと謀る者ありは、折伏の筆尖は鋭き劔の如く、其法衣を着せる惡魔に

投せられ、其迷謬は寸断し去られんのみ、請ふ法衣を着せるの惡魔とす勿れ、大日蓮の門下に属せる法子法孫一吾人は敢て茲に之を警告するのみ(孤松)

千葉の清興

紫山櫻水生

梅香の神宿の宿より歸りて、鶯のみは开が若葉の陰に嬌音を弄ぶ、紅桃白梨漸く娟と競ひて、人の心何となく浮く三月こんな時に宗教問題も聞く筈の果せるかな、千葉町に於て佛耶兩教の衝突、二十八日本化宗友會が日宗保險會社の三階に開設されたる其日、廣部永真師がわざ／＼の來京は我本多日生師に开が應援を請ふ爲めなり、師は止得ぬ用事の爲め、清水梁山師はどの事なるも師も亦來る筈のに來らず、之は何しものかの末、松本郡太郎氏に札は落ちて予へも強てこのこと、さらばとて其儘に車を走らせ濱車に乗り千葉の演說會場羽衣亭へ着て見れば、聽衆は押壽司ほどにて辨士は既に半を過したり、かくて予等も演了したる後清水師も來りて、先づ聽衆に對する手應は確にありて勝利は我に収めたり、明る日午前、戦中の英氣よろしく濫發すべしと云ふ程には非されど、ふらくと數人相携へて散步せし結果は、寒川より舟を流して海に遊ばふと云ふ之れは川島君なり、予先づ賛成

(完)

して事こゝに成立し用意調いて、さて肝心の棹を操る人は皆賢顔なれどなし、此處に名乗り出たるは井上師普し取たる何とやらと得意の腕に舟は動きろぬ、此に於て眼が痛い云ふので清水師を此舟のお客様となし、井上老を船長と奉り山岡、川島、清水同伴の人、及び予の四人は或は水夫或は火夫或は小使等と役割が定まり、お笑の内に舟は四五丁も下つたが引しは時の度々舟の底が吸て動かす、其都度水夫又は小使の役割あるの所以を以て四人かはるゝ川に入て舟と押す、つまりは舟を流すのでなくて舟と曳するなり舟を押なり、海に出たことは出たが客様又は船長様は兎に角、水夫たる我等は空腹に堪へず、其處等のしゝみ拾の男を頼て一二三四五六、六人の調度の爲め走らしたるに、やつとの事に結飯計六個梅干六ツを頼る賞賛の体に食ひ終り、此度はさしはの力に依りて意氣地なくも歸業して、ホツとしたり、但し宗教家の遊びは此無邪氣なる遊びも時に亦興あるべし、此間に於ける各自の胸裏に得たる宗教觀察は今茲に云はずもがな、其ヤ、裏面の方を抽かんか、川嶋君が衣物のまゝ、真朝さまに水中に落ち入りてつゞ鼠、偶小兒が先生がくゝがと指し笑ふところ實は氣の毒なりしと、山岡師が水中に舟を押して大得意の處、忽ち名もなき貝がらの爲に足のうらに敵疵をひたる不覺さと、予の知らず急流とでもないが少なき瀬に出くはせて幾度か倒れんとして、その結果足の指に是又貝の爲敵疵受

たる等重なるもの也、實は清水氏のお客様はうらやましく、井上氏の舟頭はありがたく、されど川島君のつゞ鼠と来ては御免〜
この日に浮みたる詩想は左の如し、但し忘れたのは上乘のものばかりなりしと斷り置、呵々

よめ菜つむ籠その儘にしゝみかな

○ 桃栗や花見がてらの沙千狩

○ さむ川や水あた、いそぎ遊いな

○ 妹は紅のけだしや沙千狩

○ 手なのべてうみ藪を探るわらへ哉

○ 葉積の積から興の桃見哉

○ 水のみに文字かくやうや桃の花

○ 眼の女は一入ゆかし沙千狩

○ 貧富のけじめ用なし沙千狩

○ 給の自慢はなしや乙女かな

來者不拒

須からく品性の修養に勉めよ

孤松 窪田純策

吾人は想ふに世間と謂はす出世間と謂はす、品性の腐敗し品性の墮落せしこと、恐らくは今日より甚しきはあらず、而して萬人一齊に品性、腐敗墮落を叫んで止まざることも、亦今日の如く熾んなるはなし、而も之を喧囂として叫ぶ族らにして、夫れ自己が品性の墮落し腐敗せるものあるを識らず、厚顔尙且之を唱呼して意氣天を衝くの概あり、恰かも彼の剛虫其身の惡臭を知らずして、個尿の汚穢を語ると其趣きを同ふす、そも之れ何等の滑稽にてあるぞ、

人として品性の修養を缺ものあらん歎、如何に冠冕の善美を盡せるを以て其身を粧ふも、彼の緩猴の衣冠して揚々得意の色あるが如く、却つて其痴や笑ふに價ひせるのみ、嗚呼品性の修養は最も勉むべきの急務にして、吾人の眞價を代表し吾人の尊嚴を保持するものは、即ち此品性によつて求め得らるゝなり、果して然らば品性は人の花とも見るべく又菓とも譬ふべきにあらずや、然るに世の智識の發達は非常なる速度を示しつゝあるも、品性の墮落腐敗は日一日に之に伴ふの

奇觀を呈す、是れ怪むべきの變現象にあらずして抑も何ぞ、豈酒歌の極にあらずや、

斯の如き現象の由來する其起因は、そも那邊より發現するものなるか、吾人の大に考究を要すべき問題にして、實に數多なる原因の存在するは論なしと雖、先づ精神的修養の完備せざるに基ひすと謂ふべし、而して精神的修養は之を宗教に待ざるべからず、然るに其宗教は既に感化的靈能と失ひて、幾んど氣息奄々の境遇に陥落せり、日に月に社會の腐敗品性の墮落に趨くこと、豈所以なしとすべけんや、吾人は今自から宗教家として斯の言を爲す、或は之を否定する人あらん歎、開は未だ宗教そのもの、眞價を知らざるの士として、吾人は嗤笑し去るを憚らざるなり、知らずや宗教の吾人が精神界に於て、其有てる處の勢力の偉且大なるものあると、拱手熱慮し來らば思ひ半ばに過るものあらん、故に「オーラストン」は謂へり「人間最上の任務は一面に於ては眞理を認識し、他の一面に於ては之を行爲に發表するにあり」と、是則ち吾人の性質品行を陶冶すべきは、獨り宗教の占る處なるを明言したるものにあらずして何ぞ、

然るに世人の品性墮落を叫ぶよりも、更に之より甚しきものあるを、吾人は其多くを宗教家に於て之を視るなり、今日の如く宗教は其感化的靈能を消耗し、萬人の精神界に向つて何等貢獻する處なきに至りしもの、或は學理の光明に其不合理を照破せられしものなきにしもあざれども、多くは教育家の如きは先其第一に指を屈せざるべからざるものあり、密かに思へ我國佛敎家の品性の墮落し腐敗せるものあるを、如何

に久しき因縁を我國史に有し、習慣的に其生命を維持し來りしも、多少新智識の養成せられたるの士は、措て顧ざる如き傾向を呈せり、之れ果して佛教そのもの、價值なきが爲か、否佛教中の或物の信奉すべき價值なしと謂ふよりも、之を宣傳すべき任務ある僧侶なるもの、品性の腐敗し品性の墮落せるものあるをもつて、之に近づき之と齒するを屑しとせず爲に金甌無瑕の佛教も自然遠ざけらるゝに至れるは、勢ひ又止むを得ざる處なりとす、豈悲むべきの至りならずや、

佛教を腐敗せしめたるものは佛教にあらざりて、教家そのもの、腐敗せしめたる也、否教家そのものは腐敗せるも佛教は決して腐敗せざるなり、彼の堯の服を著し堯の言を誦す之れ堯のみと謂へるが如く、今日の僧侶と雖佛陀の遺訓を奉戴し、謹みて實踐躬行を勵まば堯の服の如く堯の言の如くに、人は尊崇と信念とを傾けて之を迎へるは、吾人の言を待すとも、今日の如くに腐敗墮落の頂點に達するもの、誰か一顧するものあらんや、是則ち教の權實理の淺深を論するよりも先教家そのもの、品性の修養を鼓吹するの、最とも急務なることを吾人は疑がはざるなり、試みに視よ今日の教家そのものを、彼等か心理に於て熾るが如き信念と、溢るゝが如き熱誠を有せるもの、果して夫れ幾人かある、寥々たる晨星尙譬に足らざるが如きならずや、吾人は長大息に堪へざるなり、近時門外の士によつて佛教の改革を論せらるゝに至る、而して其議論の當否は暫らく措き、兎に角に改良若くは革新と謂へることに、耳目を傾けざるのみならず、殆んど對岸の火災視するが如く、何等反省したるものあるを聞かず、抑も怪むべきの奇觀にあらざや、能化の教家今や所化の教訓を受

く、當來の比丘白衣の說法に従ふと謂ふ、五濁經に説ける末法の五乱を、吾人は現實に之を觀るに至る、之をしも悲まざるばらも何をか悲むべき、天下幾萬の佛教僧侶よ、先汝か良心に之と問ひ而して反省を試みよ、獅子身中の蟲、法命を奪ふの賊と彈呵せられたるものは、實に今日の佛教僧侶そのものなるを知らば、奔つて佛陀の尊前に跪き大に悔ひ改むるの宣誓を爲して、先つ汝か品性の修養に盡瘁せんばあるべからず、

世人の佛教家を目指すこと幾んど徒食無能の徒として之を迎へるもの、如し、而して教家夫れ自身も敢て之を怪まざるもの、蓋し顛倒も亦甚しきならずや、苟くも教家は夫れ人天の導師たる聖職を帯るにあらざるや、然るに之を知らざるもの、如くして、貪婪の慾を恣にせんことをのみ、汲々乎として勉むるものあるは、則ち我聖祖日蓮の佛海の白浪と叱し、法山の綠林と呵せられたる聖訓を、汝は詳すること能はざるべし、而して白浪と呼れ綠林と謂はるゝも、尙且つ平然たるものあるや、恐らくは常識を有せるの徒として、之を甘受するものはあらざるべし、然らば自から省みて其聖職を汚さざらんことを、勵み勉めずんばあるべからざるなり、

「汝常に勉むべし、汝が外に顯はす事は、之を内心に實存すること、汝常に勉むべし」と、吾人は之を古人に聞く、實に玩味すべきの箴言にあらざるや、然るに世多くは全たく是と異なり、口に美言を吐き身に徳行を修むるが如くして、而も其心裏を解剖し來らば、實に吾人の筆するに忍びざる多くの奸邪を潜めつゝありて、時に種々なる罪惡を構成遂行して視として知らざるもの、如く、自から勉めて慈仁を粧ひ以て世人を眩惑

し、而して其良心に恥ざるもの實に多々あるを觀る、恠とに内心に實存すること、汝が外形に顯はす事との、表裏背反するの最とも太甚しきものあるを、先世人に視るよりも特に教家に於て其多きを觀る、噫彼等が錦繡綾羅の三衣を以て醜態を飾り、口に滔々教義を談すること懸河の如く、而して活る菩薩の如く來れる天使に似たれども、若し仔細に抽象的觀察を試み其心理を窺ひ來らん歟、身に纏へる錦繡の袍衣口に説ける無價の法門は、或物に向つて虎視眈々たるの趣きを示せり、熾るが如き信念溢るゝが如き慈悲の、如何して斯かる彼等の心理に宿ることを得べき、其隻影だも吾人の認むる事の得べからざる、豈所以なしとすべけんや、放逸にして五欲に著し惡道の中に墮なんど、本佛の嚴誠は教家の三省すべき金言にあらざりて何ぞ、

品行の卑陋なる所以は性質の善良ならざるが故にして、性質の善良ならざるは其修養と缺けるが故なりとす、然り而して之が修養は則ち宗教に待ざるべからず、宗教の吾人に與ふる所の信念は實に品性修養の要素にして、其享る處の感應の吾人が精神に向つて、如何に饒多なる修養を爲さしむるや、吾人が論議を爲さるゝも既に明らかなり、然るに最とも密接に感應を蒙るべき處の我佛敎家にして、特に世人よりも其品性は腐敗せり、之れ果して何が所以ぞ、則ち教家の生命とすべき處の信念の廢耗せるより、産出せらるゝ現象と謂はざるべからず、既に敎家にして信念を絶つ、彼は精神的に死せるもの焉んぞ敎家たるの、品行資性を保つことを得べけんや、吾人が曩に謂ひたりし、彼の猿猴の衣冠して得意の滑稽を演ずるが如く、品性の墮落せる教家の糞穢を粧ふて世人に接す

ると、蓋し擇女處なきが如きものあるにあらざるや、比況も茲に至つて極まれりと謂ふべし、

凡う敎家にして高潔なる品行を把持し、嚴肅なる節操を遂行せんと欲せば、先つ其源泉を鞏固なる信念に發せざんばあるべからず、而して其信念の確立は深く教義の根底を研討し來りて、此處に一大安立を定めずんば、人天導師の聖職を奉載し敎家の操行を完ふするを得ざるなり、則ち信念の勢力なるものは實に偉大なるものにして、能く放逸邪修を遠ざけ輕佻浮薄を擯けて、善美なる薰化を性情氣質に與ふるものたるを知るべし、然るに或敎家にして既に其信念を缺く、品性の腐敗し墮落せるに至るもの、勢ひ又止むを得ざる處なりとす、

爾れ斯の如く敎家の腐敗墮落は、其の累を無價の教義に波及し來りて、神聖なる本尊の威嚴を傷瀆し輪奐双美の殿堂も、遂に魔廟視せらるゝに至るもの、實に免かるべからざるの敷也とす、而して今日は斯の如き状態を示せるものに似たり、

开は則ち敎家の墮落せるを以て品性の腐敗せるが爲に、觀ずや世人の殿堂に上りて敬虔の誠意を現はさるゝと、敎家に向つて先輕侮を以て迎へるが如き傾向を呈せるにあらざるや、是則ち敎家そのもの、品性の修養を缺るに基ひせるものにして彼のオーストンの言の如く、吾人敎家たるものは先其真理を認識して、胸裡に充全なる信念を蓋蓋し、他の一面に於ては之を行爲に發表して、人天導師の体面を汚さらんことを敢爲躬行なさんばあるべからず、

「心に恥よ墨染の袖」とは古歌によつて吾人は之を聞けり、而かも其墨染の袖は之れ菩薩の相貌にあらざるや、然るに今や此尊き相形をして却つて世人に忌避せらるゝに至るもの、其罪蓋し我佛敎家に向つて問

はずんばあるべからず、實に斯の如くに今日の敎家は如來の衣に侮蔑を與へたり、而して汚辱を如來の座に及ぼし、當に如來の室に至らしめんとす、彼の惡魔の沙門となつて我道を壞乱すと、佛法、盡經の明文をして今や現實ならしむるもの、如し、吾人の懼れ且つ戒むべきの事にあらざるや、

論じて茲に來れば今日の如く佛敎を頽廢せしめたるものは其罪を先敎家そのものに歸せざるべからず、而して要する處は敎家の品性墮落に基ひせるものにして、斯の如く墮落腐敗を吾人に叫ばしむるに至るものは、實に彼等の信念に乏しきによるものにして、若し溢るゝが如き信念の幾分を彼等の抱持せるならば、隨つて其品性は清廉高潔なるに至るべく、而して人天導師の聖職を奉持せば、世人の敬仰憧憬を厚ふして多大の法益を蒙らしむること、佛在世の四衆に於けるが如きものあらんを信ず、故に吾人は我佛敎家に向つて須からく品性の修養に勉めよと警告して、彼等が銷磨せる處の信念を喚起せしめ、先其自行を全ふして進んで化他に及ぼし、王法佛法の繁榮を期せんことを切望して止まざる處なりとす、敢て望む佛門の志士須からく汝か品性の修養に勉め以て佛祖を恥かしむるなからんことを、

(完)

各宗側面觀

眞應 笹川 眞應

本尊信條の確定は宗教成立の要素である、本尊信條の紛亂せるはその宗教の死せるを表白せるものと謂ふべきである、佛敎各宗が自己宗旨の本尊信條を没却して其敎義の體案を示しつゝあるは、佛敎統一のため、社會人生の爲に寧ろ廢すべ

きではない、

今此に各宗が墮落せる状態をかいまみるに、骨董宗釋教宗香具宗等の名稱相離せるものが現出した、これ、あながち吾人の妄言惡評にあらずして事實斯かる體名の添加せらるるには何人も暗るに疑からざる所である、佛敎列傳を以て自任なし本尊敎義を度外にして自誠を談つて、局外をして思はしむるは天台宗にあらずや、天台の尊院は、これ、骨董宗の店前と何事關ふ所はない、

法華でも念佛でも本尊は觀音でも樂師でも阿彌陀でも何んでも無賴者、我宗は正に天下の雜炊宗であるとは、吾人の考案にあらずして釋教僧侶の誇稱する所である、

念佛一門の僧侶は比較的の本尊信條を嚴守せるが如き觀あるも委細に洞察せば僧問者の假面を暴露するである審察の體問は門徒の愚痴を裁殺せられつゝあるも女人接近は彌陀の慈光に沐するとは誰人の皮肉やら笑止の事也、この宗は和讃歌詠を以て説教唯一の具となし假色使ひに面白く節つけて藝人氣取の説教しつゝあるは僧問宗たる所である、



統一團報

佛耶二敎の衝突 (千葉町に於ける)

客月二十六日千葉町羽衣亭に於て顯本法華宗の開會せる演説に基督教を駁撃したるより、豫て此地は同敎の比較的盛なるものから、日瑞同盟基督教會は我に向つて戦ふの心組にや、續て二十八日の夜同敎會に於て佛敎に對抗するの演説を開き印刷物及び處々に廣告札の貼付を爲し、質問隨意の銘を打出して氣焔あるもの、如し、されば佛敎徒に於ても捨てべきものにあらねば、先づ日蓮門下の同町本圓、本敎の貳ヶ寺の細素主となり、近傍の僧俗亦之に應じて其夜彼の會場に望みたり、さて彼の宣敎師エフフランソワ氏の演説の一段落を告げんとせしとき、日宗の青年石川清氏慎重の体度にて徐ろにエ氏に向ひ神の實在は信難しとの質問を放てり、エ氏は演説後別室にて貴氏一人に答ふべしと謂ふ、石川氏は此席内に予と同見解を抱けるもの多ければ、貴會廣告の通り公衆の面前に於て質問に應辨せらるべしと追及す、然るにエ氏は言を左右に托して答へず、この時會場の人々は廣告に違反せりとして頗る喧擾の觀を呈す、其時基督教の信徒等は惡魔來れりとして一齊に拍手しオルガンに合せて讚美歌を唱へ始めたり、日蓮門下の僧俗は彼等を捨邪歸正せしめんとて等しく靜に御題目を唱へ出せり、此間石川氏は其義をして寧ろ公衆に訴ふるの利なるを覺り、門外に直立して破耶敎の演説を開始しぬ、又一

一大責任にあらずして、何哉

面日宗の學生大塚無偏君は稍場の穩なるに當り猶も答辨を迫りけるに、同會中より二人の婦人現れて種々甘言を以て之をなだめなせせるも理義は何處迄も明にせざるべからずとて益々之を責立つるに、東京より來合せる救世軍の大尉と稱する寺本顯性氏出で來りて、此會堂にては答辨し難し、他所にて予は責任を帯びて言へんと謂ふ、本圓寺主川島氏は然らば我道場に來り明かに答辨をせられよとて同氏を誘ひ、此に於て前記石川氏と寺本氏の間には問答は開かれたり其大要を記るせば

石川氏 基督教の神は如何なる者なりや
寺本氏 我が敎の神は、聖書に依るに、今より凡そ五千年已前に世間萬物を造れる全智全能の神にして、今日と雖、凡て此神の支配を請げざるものあることなし、故に此神を信すれば自ら幸福を得若し信せざれば禍害を招く者なり

石川氏 世間の學理上に依るも萬物は無始無終にして及佛敎の敎理よりせば無始無終なるは勿論、因果の理法に依つて運轉するものにして、決して神あつて之を造りしものに非ず、又近々五千年已内に此の世界を造りたると謂ふが如きは、現今の科學よりするも許すべからざる愚論にして取るに足らざる也

寺本氏 宗教は學問と異りなれば、學問を以て之を論ずる如きは不當なり、貴氏等には神の實在を信すること能はずとも、予は深く神の實在を信するものなり
石川氏 貴氏の言の如く宗教は元より學理に異なりと雖、宗教の正邪を判するに、學理の考證に依らざるを得ず、若し貴氏が謂ふ如く道理の批判に依らず、只自己の信する處を真理とし自己中心の判断を以て神ありと論ぜば、此に狐狸を崇拝する者ありと假定せよ、其迷信を責むる場合也、其者若し「予は基督教の神よりも狐狸を尊しと信ぜり」と謂はば、斯る場合學理に依らずして如何して其れが正邪を判別するや、實、不道理と云はざる可らず

石川氏 貴氏の言の如く宗教は元より學理に異なりと雖、宗教の正邪を判するに、學理の考證に依らざるを得ず、若し貴氏が謂ふ如く道理の批判に依らず、只自己の信する處を真理とし自己中心の判断を以て神ありと論ぜば、此に狐狸を崇拝する者ありと假定せよ、其迷信を責むる場合也、其者若し「予は基督教の神よりも狐狸を尊しと信ぜり」と謂はば、斯る場合學理に依らずして如何して其れが正邪を判別するや、實、不道理と云はざる可らず

寺本氏 予は聖書に於て深く神の實在を信して疑はざるもの也
石川氏 君は前書を撰述すのみにて予が質問に答へず、隨に予が議論に降伏せりと認む

此時戸外より寺本氏を呼び出す者あり、氏は卒然立去らんとす、石川氏之れを止めて曰く、君は勝敗と決すべしとの約束ありと責めたるに、寺本氏は大に自己の過失を謝して警官に伴はれたるが、此時聽衆は等しく基督教の不道理を叫びたり、次で翌二十九日は我佛徒は晝間道路布教を爲し、彼が會堂の前に於ては特に彼教の横義を破し、午後六時よりは羽衣亭に於て耶穌聖蹟演説を開始したり、此夜は東京より清水梁山、溝口太連、松本群太郎、及本團の松尾英四郎の諸氏應援し頗る盛況を極めたり、是より先き我方よりは飽迄も正邪を決せんとするの念あれば基督教會に宛て、左の案内状を送れり

拜啓昨夜問答の顛末報告並に伊耶兩教の邪正を大に論辯致度候間今夕五時より羽衣亭へ御出席被下度此段及御案内候也

三月廿九日

基督教會御中

本團 敬 寺

此れに對し耶教よりは

拜復陳者今夕五時より羽衣亭に出席して大に議論をせよとの御招待状に候へ共我等は其前に先づ昨夜佛敎の代表者を見做されし諸君各位が我等が集會の臨みて少なからず騷擾を引き起して我等の集會を妨害したる事に對して謝辭を受くべき箇を存候間ける處に依は各位には今夕五時より大演説會を開きて基督教の學理及び國體に反する旨を論議さるゝ由なるが各位が昨夜及ぼしたる事は既に全然學理と國體とに反したる御騷擾と存候故に各位にして昨夜の騷擾に對して正當の謝辭を送付されざる限りは我等は遺憾ながら各位の御申込に従ひ羽衣亭へ拙筆して御問合仕る程に各位を信用政策候例卒不意御説承願上候各位にして謝辭を送付されし上更に日を期して當

地に相當の身分ある紳士にして開派より信用され得べき立會人を定め且つ双方の紳士に同等の發言權を與へ同一時間演説を許す事にも相成候は、我等は喜んで私に或は公に會合十分に我等の所説を悉し可申候に付き寫し御勸考相成度奉願候期日は已に先約も有之候事故四月中旬以後に御執計願上候先は御返事迄也

日曜同盟基督教會

此返書を得たる我方に於ては、更に左の照會狀を協會に送りて飽までも挑戦したり

御問答之總意其意を得ず候昨夜の事たるや貴教會が質問隨意と廣告ありし爲め之に對し質問者現れたるものなるに答辯無之爲め聽衆中貴教會の發言に付不満を感じたる迄に有之其過失却て貴教會に有之候次に此體を幸とし是非共相互教義の邪正を決し當地人心の歸向する處を知らしめ度候條爲道爲國必ず今夕御來席被下度更に照會候也

追て貴教會より御來席無之時は貴教會は敗北降軍を自認したるものと斷定可致候

三月廿九日

基督教會御中

本團 敬 寺

然るに協會には初の勇氣何處へやらの有様にて、絶て返信さぬもなすこと能はず、唯其夜餘勢とつながらん爲か、會堂に於て演説會を開始せり、我方にはいよいよ演説場に於て之れが顛末を披露し、更に川島顯妙、石川顯隆、竹内無着、山岡會俊、廣部永真、松尾英四郎、關田養叔、松本郡太郎、清水梁山の九氏各得意の辨を以て種々の方面より彼の非を攻撃し、大に破邪顯正の實を揚げたり、其翌三十日は竹内氏等數名道路布教を爲し、午後よりは同じく羽衣亭に大演説を開き石川松尾廣部清水の諸氏廣長舌を揮ひ、聽衆場は滿ちて立錫の地

より演説を開けり其辨士は

開會の辭 石川 見 覺
社會と宗教 影山 謙 二
佛音聲 原田 容 廣
聖祖の元氣 能仁 事 一

影山謙二氏は實父逝去後愁然忍びざるものあるにも拘らず、爲宗引續此演説會等の爲め三夜不眠にて奔走せられしと云ふ熱心賞歎すべきなり

●管長事務取扱祝下の御病氣 本多大僧正祝下には去る六日病氣を押し品川御出發あり、七日馬場にて少時休憩、其夜十一時廿四分岡山着、八日信徒小野善吉氏の法要導師御勤めあり、九日小野氏施主となり信徒數百名を饗し大に法要を張られ、其夜は大演説を開會御出席の都合なりしところ 俄然發熱し急病勢を増せしかば、野上醫師に診察を受けたるに腸加多留黃疸との事にて、此處二週間位は動搖することなく食物も總て固形体を禁じ、靜養せらるゝこととなり、内山下顯本法華弘通所に御臥床あり、されは演説後に本山へ御登山ある都合なりしも、本年の大法會には代理にて濟まざるゝならんぞ

●顯本法華宗要品の出版 從來顯本法華宗初心行者の專用に供すべき單純の要品なき事は、皆人の遺憾とせし所なるが今回品川妙蓮寺山根顯道師の校訂出版せられし要品(附回向文)は、此欠點を補ふに足るべき極めて適切な出版物にして師は品川信徒村田和藏佐々木久平向氏の出資によりて此淨業を遂げ、先づ惣本山大會に際して一千部の施本をなし、同時に鉛版に調製して本誌廣告の如く、印刷費費にて今後普ねく

もなく前日に増したる盛況にして聽衆全く我正義に服したり尙ほ本件に就ては其後日蓮門下協力を爲し、一法團を作り盛に宗法の發揚を計る由也、并は次號に掲載する處あるべし、該件に付顯本法華宗の長谷川日濟井上日冲等の諸師本團寺へ常詰にて大に講されたりとぞ (某生投)

●岡山の演説會 三月十、十一日の兩日岡山本行寺に於て列の篤信會の演説を開會せり

開會の辭 中川 事 顯
二大宗敎の成立及批評 原田 容 廣
國家主義と日蓮、聖人 能仁 事 一
情性 原田 容 廣
統一革新の機運 中川 事 一
罪の多き者は救の大なるに依れ 能仁 事 一

●影山謙二氏の嚴父の逝去 影山謙二氏は本宗に歸依してより日淺きも、非常なる熱心を以て宗法に盡せることなるが同氏の實父は美作勝田郡古吉野村にして石川兼助と云はるゝ人にして從來日蓮宗の人なりしが、右影山氏は最後の大家は本宗の正義を勸むるにありとて、先づ本門の本尊を掲げ奉りしに、兼助氏も又晝夜情りなく唱題ありしが、遂に三月十二日何等の苦痛なく眠るが如く逝去あり、尙影山氏は引導を本宗にて執行すべしとて、能仁原田兩師の來郷を請ひ翌十三日夜十時葬儀を執行せりと、津山の林伊平氏は信徒總代として來會され、十一時頃よりは當地の單稱派より一場の説教を乞はれければ、能仁原田二師之が爲に論導ありしとぞ

●勝間田の演説會 作州勝間田に於ては石川見覺、額田治郎 全金市 全嘉平治等諸氏の盡力にて三月十四日午後四時

有志の人々へ頒與せらるゝよし、本園にも其一本を寄贈せられしが、全部悉く二號活字總振假名附にて、老人婦女子の獨體裁美麗、一點申分のなき出来榮なり、見本を望まざるゝ方は郵券十四銭を封入して品川妙蓮寺に申込さるれば、直ちに發送せらるべし

●神戸短信

當地に於ては先年來毎月一二回つ、播州妙信寺住職上田智量師の來錫を受け一時信徒の住宅を假弘通所として熱心布教せられしが漸次信徒の數が増加し來りたるを以て昨冬十一月當市奥平野十郎池の南手に於て特に布教所を開設し同師の常住布教あらんとし懇請せし所同師に於ても宗教上極要の地にして漸く流布の端緒に付んとするを察し本月六日附宗務廳の許可を得て妙信寺住職を辭退し専ら當地を以て實業停車場迄見送りを受けつゝ神戸信徒總代の歡迎として同寺へ特派したる者には喜悅を以て迎へられつゝ、正午時の列車に乗じて愈々來住せられたり而して當日は幸ひ彼岸の結日なるを以て同所に於て直に彼岸會式を執行せられたれば各信徒は日頃の望の達せし悦びもあり勞々一層の信念を深くして參詣し式後同師の神戸布教沿革等に關する演説ありて又信徒の所感を述ぶる者等もあり誠に盛會にてありき(信徒新谷平三編)



顯本之光

人生の最大問題

山根顯道 說教

諸君 人間の一生に於て一番の大問題は何でありませしやうか 斯様な問を起しますと 一寸即答に凝滞なくお答なさる方は マーたんど無い様な譯で やれ何が大事だの彼が大切だの 金錢さへあれば何でも叶ふの 肉躰が健全なら何でも出来る の いや兄だ、弟だ、親類だ、朋友だ、妻だ、妾だ、子だ、孫だ、やれ花見の、月見の、温泉の、遊山のと、それこそ人間は一年三百六十五日、兎や角騒ひで、苦んで、悶ひて、幢がれて居る計りで、けちな、譯もない、取詰てお咄にならな い様な事計りに驅ずり廻りて、空しく一生を通りぬけて仕舞ふので、「朝に紅顔ありて世路に誇るも夕には白骨となりて郊原に朽ぬ」と云ふ格言にびたり……人生五十、夢、幻

咲きにけり散りにけりとして大方は長き春日を花に暮しつ 櫻見し春はさきの夢にして世は振りかへる五月雨の空 どうです 十九だ、二十だと思ふて居る内に、何日の間にや

寄贈新刊雜誌

Table listing various magazines and their publishers. Columns include magazine titles (e.g., 佛友雜誌, 宗教學報), issue numbers, and publisher names (e.g., 三河、甲斐、甲府).

ら三十となり四十となり果ては老耄爺と化けて 佛となればありませんか、抽僧の考では何が大事だ 大切だと云ふても、人生に「死」と云ふ事は最大問題は なく、宗教の安心は最大切な事はないのであると思ふ さらば安心と云ふ事を少し談義しませしやうが、安心とは安き 心と云ふ義理ではありません、安とは安くと云ふ意味で、不 變、不動の義でありません、先哲の書にも「止るも定る也」と 釋してありませし、悲に遭ふても、喜に遇ふても、忙はしき 時も、又永く教を聞かんで居ても、忘れもせず、乱れもせず 心か泰然と定つて變らず動かさざる事を云ふのであります、大 學に「止る所を知りて而して後に定る」と説き「人にして止 る所なくんば鳥にだも如ざるなり」と教へてあります、成 程鳥でも鶏でも、黄昏になるとさちんと其栖に歸ります、然 るに人間として若も其心の定りと云ふものが無ひならば、依 止處がないならば、それこそ鳥にも劣る次第であります、 うれで何故亦此定りが人間に着難ひかと申しますと、それは 畢竟「生死」と云ふ事が判明と知得されんからであります、 マー考へても御覽なさい、今茲處で汝と我と別れるけれども 何年後には乾度花の程で再び邂逅と云ふ事が定つて居る離散 なら、左程憂苦も何とも有ますまいが、一度「死」と云ふ黒 幕に掩はれて、再び見る事が出来んとすると、非常に憂く悲 くなるのでありませしやう、サ一此最大憂悲!!死の問題、これ

毎月一回二十日發行定價一部六錢五厘(郵税共)半年分卅六錢

師子吼新報

第二十號目次

師子吼	日宗各派の管長に與ふるの論
論說	照魔鏡
特別寄書	博士の價值
	吉書始
	閑窓獨語
寄書	田中智學君に質す
	田中智學の研究會に就て
	或人の問に答ふ
漫筆	思のまゝ
	今狂子

發行事務取扱所
東京麹町區平河町五丁目二十四番地
師子吼新報社出張所

佛教文藝十二大家投票募集

○論文○評論文○小説○新体詩○和文○和歌○漢文
○漢詩○俳句○雜文○編輯○繪畫
四月三十日〆切り△詳細は「佛教文藝」雜誌第二號を見よ
(一部六錢五厘)五厘切手
投票所 東京淺草 新谷町十 **佛教社**
當選者の肖像、傳記、所作は五月の「佛教文藝」に掲載す、



佛旗六金色 調進所 六金色價表
御寺院御幕 唐縮緬製

種形別	並品製	上品製	新友仙	本友仙	染抜
在家用	廿二錢	廿八錢	卅五錢	五十五錢	
寺院用	四十三錢	五十錢		一圓三十錢	
同極大	七十五錢	八十八錢		一圓二十錢	

右外別大特大最大數種●國旗本友仙染抜四十五錢
御寺院用御幕●唐縮緬紫幕●天竺木綿及五郎丸白幕
京都市油小路魚棚南 **吳服商 高橋正意**
御木山御用調進所

六社同盟購讀料 滯納者處分法

雜誌購讀料を滯納し遂に其支拂を果さざるものは各社互に其姓名及事由を通告し其甚しきものは之を同盟各紙上に掲示することあるべし

明治卅五年八月二日伊豆伊東に於て之を決議す

教友雜誌 日宗新報
日本之柱 北友雜誌
妙宗統 一誌

無盡燈

四月一日發行
第八卷第四號
一部定價拾錢

- 研究
- 科學と宗教の調和に就て
 - 小乗教の分派に就て
 - 他力本願の先天的及び實在的證明
 - 倫理標準としての良心説(質疑解答)
 - 斷乎としたる生活
 - 釋迦見真兩聖の同軌
 - 寶曆文化間の三業惑亂關係書目
 - 南征日記(其三)
- 時論
- 反道徳主義の文字と宗教○露帝信教自由を宣言す○通世思想を概す○夜叉娼婦録○大町桂月子の宗教論○三月の誌壇○近事會報
- 附錄
- 西藏文妙法蓮華經解題(二)
 - 梵文妙法蓮華經和譯(三)
- 東京集鳴 眞宗大學 **無盡燈社發行**
- 朝永三十郎 藤田觀龍 今井昇道 郎波子 曉鳥敏 常盤大定 住田智見 南條文雄

注意

▲▲▲注意▲▲▲
●本誌廣告
本誌は既に全國各停車場へ備付居れり
本誌月定期購讀者へは
（月定購讀にして代金拂済のお方のみへ）
法の鼓と代無添付することせり、
毎月一回發行法の鼓は至極平易の文字にして法語あり小説あり、最と可愛らしき冊子也

讀者諸君

「統一」の隆盛と發達を成さしめ給ふは單に購讀者諸君の爲され方一ツ也 諸君か購讀料を拂つて下さらねば「統一」は衰退の止を得ぬ次第になります、
諸君の方では月々僅かの購讀料でも、團の方ではうれが頗る多額になるわけですから、此へん御察しを願いたい、
又「統一」は前號より全國各停車場に備付の事もあり月々購讀者諸君には法の鼓を添付することにもなりましたから、旁々運轉の油、つまり雜誌代を早く拂ひ込んでもらいたいのでありませす

統一團會計部

御 籬 武 者 人 形 附
 東 羽 子 東 羽 子 東 羽 子
 板 子 羽 子 東 羽 子 東 羽 子
 御注文に依り調製致候

東京日本橋通り十軒店
久月本店
 中原 福藏
 (電話本局二千三百八十二番)

岡 山 市 上 之 町
 吳 服 卸
柿屋本商店

柿屋 洋傘 (岡山市上之町)	柿屋太物店 (岡山市上之町)	吳服卸 柿屋南店 (岡山市上之町)	吳服卸 柿屋上店 (岡山市車町筋)	柿屋鼈甲店 (岡山市中之町)
----------------------	-------------------	-------------------------	-------------------------	-------------------

團 告

(毎月補助金に付)
 本誌全國各停車場待合室備付に對し其舉を賛し毎月補助金を
 申込まれし奇特家は左の如し

岡山市	久城茂太郎殿
姫路市	中村祐七殿
東 京 市	中原福藏殿
神 戶 市	齋藤金太郎殿
吳 市	木村孝殿
品川	大島良太郎殿

千葉縣内左の各區本誌購讀料集金の義今般左
 の各師へ依嘱候間何卒諸師の内へ御拂込被下
 度願上候也

第三教區	長生郡押日來光寺 山田日廣師
第四教區	全部澁谷行光寺 前田日應師
第六教區	山武郡清名幸谷東光寺 草切榮玉師
第七教區	全部御門妙善寺 飛山日甫師

他教區は追て依嘱人名報告可致候
 明治三十六年三月

統 一 團

本團發行の法の鼓を施本せよ、布教雜誌として
 は恰好のもの也、委細廣告にあり

一本誌代金不納の諸君は至急御送金ヲ乞
 一雜誌交換 寄稿共移轉先へ願升

一本誌は毎月一回十五日を以て發行期日とす
 一本誌は一冊八錢十二冊則金八十六錢廿四冊前金一圓七十錢郵券代用は二割
 増但五厘切手を其とす
 一讀讀申込の節は住所姓名を附書にて認めらるべし
 一爲替局は淺草區北松山町として御振込の事
 一本團は別に領收書を發せし但し領收證を要する向は返信料を封入すべし或は
 爲替振込の節拂渡通知料貳錢を振出郵便局へ納付すべし
 一廣告料は五號活字廿七字詰每一行金八錢なり

明治卅六年四月十五日印刷發行

發行人	井村恂也
編輯人	山根顯道
印刷所	鈴木暉學
印刷所	北澤活版所

發行所

統 一 團

東京市淺草區南松山町四十五番地

統一

第九十七號要目

- 勸信要義(承前)……………本多日生
▲彼れは出でよ此れは退けよ……………松尾忍水
- 統一問題と其人物……………記者
▲道德問題に就て……………笹川篁堂
- 日蓮大聖人(第七回)……………關田養叔
▲小會氏の披瀝文を評して……………冷眼熱眼生
▲松本氏の辨明書を紹介す……………
- 統一論壇の一小論文村上博士の……………古定不新
▲妙乘旅行感慨記(承前)……………影山懸雲
- 清澄山改宗と上總七里の新團結……………新無名氏
▲師弟の情誼……………秋葉純一
- 千江子の信……………不新
▲松平五峰、水野梅塙、成島毅舟、秋葉純一等の詩歌……………
- 須らく靈に於て大に富むべ大に豊べし……………本成院
▲千葉縣、作州、金澤、等通信……………
- 法華經の佛性……………鈴木孝頌

(明治三十年二月廿四日第三種郵便物認可
 公三十二年五月十五日發行統一第九十七號 毎月一回十五日)

大法主二位僧都日什大正師御遺文

前管長大僧正錦織日航師題字

大僧正 小林日至師 編輯

大僧正 本多日生師

本宗綱要

和装頗美本
 實價金三十五錢
 郵税不要

- 嘗て佛海の大波瀾を奔騰せしめたるものは本書なり
- 四箇格言問題を爆發せしめたる大主動者は本書なり
- 佛教各宗協會をして畏懼狼狽せしめたるは本書なり
- 綱要編纂委員の心膽を寒むからしめたるは本書なり
- 妙宗教義の神髓を發揮して組織的に系統的に詳細説述して餘蘊なきは本書なり
- 殊に四箇格言の一章、設け恐れず憚らず念佛無間禪天魔眞言亡國律國賊諸宗無得道の旨を痛論して一種獨特の光彩を放てるは本書なり
- 讀め、須らく讀め、眞佛教の眞意義を知らんと欲するものは自他宗の僧俗を問はず悉く本書を讀め、

發行所

東京市淺草區新谷町
 顯本法華宗 宗務廳

法の鼓

本誌は頗る愛らしき小雑誌なり

本誌定價

一部	二錢
壹年ヶ前金	二十錢
十部以上	一錢五厘宛
五十部以上	一錢二厘宛

本誌には租税、設教、小販、和紙等あり

今般統一團より本誌を毎月一回發行致し只の印刷費のみにてお求めに應ずる事に致しましたから何卒篤志の御方は檀家又は知人へ施本片として御買求め下さい澤山印刷すれば其だけ借を割引ますから積々御注文を乞ふ

○今日の良布教方法は

「法の鼓」を

施本するに限りませす、小供でも婦人でも假名さへ讀める人は讀んで解る良雑誌
 ○施本には限らず本誌購讀方もお勧め下さる

東京淺草南松山町

統一團